

四季・波留子^{はるこ}

下

quatre saisons



五木寛之

四季・波留子

4 SEASONS

五木寛之

四季・波留子 しき はるこ
五木寛之 いつき ひろゆき
下

一九八七年三月十日第一刷発行

定価 〃 八八〇円

発行者 〃 堀内末男

発行所 〃 株式会社 集英社

〒一〇一 東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇

TEL 〇三三三三八二八四二 (出版部)

TEL 二三〇一六一七一 (販売部)

TEL 二三三八二九六四 (製作課)

印刷所 〃 大日本印刷株式会社

著者との了解により検印を廃止いたします。

落丁・乱丁の本が万が一ございましたら、小社製作課宛に

お送りください。送料小社負担でお取り替えいたします。

本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載
することを禁じます。

©1987 Hiroaki Itsuki

Printed in Japan

ISBN4-08-772597-9 C0093

四季・波留子

下

ボスホラスへは行ったことがない

ボスホラスのことは 君 きいてくれるな

でも ぼくは海を見たんだけ 君の目に

碧^{アヲ}の火の燃える海なのだ

—— C・エセーニン「ペルシャのモチャーフ」より ——

その週の終りに、波留子^{はるこ}は飯塚の病院へ出かけた。布由子^{ふゆこ}に会って、達夫の申し出を承知したことを伝えようと思ったのだ。

面会室で待っていると、布由子は沢木医師とつれだって、なにか楽しそうに喋り^{しゃべ}ながら姿をあらわした。

「こんにちは」

「布由ちゃん、元気そう」

波留子が驚いたように目をみはると、沢木医師が布由子の肩をたたいて言った。

「このところずっとこんなふうなんだ。布由ちゃんはいつでも、もう退院できる状態なんだが、きみのほうの受け入れ態勢はどうですか」

「ええ、そのことで今日はちよつとご相談したいと思ひまして」

「じゃあ、布由子くんと話をしてください。ぼくはちょっと用事をすませて、またもどってきますから。よかったら一緒に夕飯でも」

「ありがとうございます」

沢木医師が出ていってしまふと、布由子は椅子に腰かけて脚を組み、微笑しながら波留子を見つめた。

「どうしたの？ そんなに人のことをじっと見つめたりして」

「今日の波留子ねえさん、とっても綺麗きれい」

「年上の女をひやかすもんじゃないわ」

「ひやかしじゃないわ。本当よ。なにかいいことあったでしょう」

「布由ちゃんも今までとちがうわ」

「どんなふうに？」

「すっかり元気になって、キラキラしてる。だって、昔は椅子に坐って脚を組んだりしなかったでしょう？」

「あら、そういえばそうね。自分で気がつかなかった」

布由子は組んでいた脚をおろすと、不思議そうにあたりを見まわした。

「このところずっと調子がいいの。なんだか、窓の外の景色や、看護婦さんや、すれ違う患者さんまで、輪郭がくつきりして見えるのよ。きつと元気になったせいだわ」

「そうね」

波留子はうなずいて、面会室のガラス窓の外をながめた。明るい秋の陽さしの中で、患者さんたちがバレーボールに興じているのが見える。

ガラスを通して斜めにさしこんだ光が、布由子の白い手の上に斜めに光の縞をつくっていた。その光の中に、透けるような血の色が見えた。

「今日は、すごいニュースを持ってきたのよ」

と、波留子は言った。布由子はいっそう大きく目を見ひらいて、のぞきこむように波留子の顔を見つめた。

「わたしの退院のスケジュールが決まったの？」

「ええ。それは沢木先生と前から相談してた通りよ。でも退院したら、わたしたちハワイへ行くの」「え？」

布由子は不思議そうに、ハワイへ？ と、口の中でつぶやいた。

「そう。実は達夫さんからお誘いをうけて、わたしが独断でオーケイしたんだけど、達夫さんたちのツアーに加わって、一緒にハワイのマウイ島ってところへ行くことに決めたの。そして奈津ちゃんもそこへ合流するのよ。すごいプランでしょう」

「よくわからないわ。詳しく話して」

布由子はびっくりしたように体をのりだして、聞いた。波留子は達夫と話したことをかいつまんで布由子に説明した。ただ、布由子が精神科の治療をうけて入院していたことが自動車の免許をとるための障害になるのではないか、という達夫の配慮のことには触れないでいた。

「でも国際免許っていうのは、今は昔とちがって、そう簡単には国内では通用しないのよ」

と、布由子は言った。

「外国に長く住んでて、実際に何年も運転をしていたり、いろんなことがある場合は別だけでも、観光旅行やなにかで、ちょっと出かけて手軽に免許をとってきたりはできないんじゃないかしら、そんなふうに聞いたけど」

「ええ、わたしもそう思うわ。でも達夫さんは、マウイ島でいろんなクルマを使って自由にトレーニングをすれば、スピードやクルマを扱う感覚だけはきつとマスターできるだろうって。そして帰ってきてから、あらためて仮免をうけるなり何なりしたほうが布由ちゃんには向いてると思うって言うてくれるの」

「それは確かに面白いプランね」

布由子はうなずいた。

「わたし、ここしばらくずいぶんクルマの免許をとるための参考書を読みあさったの。それこそ、ありとあらゆる手引書に目を通したんだけど、教習所へ通わずに試験場へ出かけていって実地試験をパスするのは、今のシステムじゃとても無理みたいだわ。でも、百に一つ、いや、千に一つは可能性がないわけじゃないみたい」

波留子は黙って布由子の話を聞いていた。たぶん、布由子は軽井沢から帰って以来、本当に熱中してクルマの免許のことに取り組んでいたのだらう。病院の中で何十冊も参考書を読み、おそらく、彼女自身で何かをつかんだにちがいない。布由子がそんなふうに熱中することを見つけた

しただけでも、喜ぶべきなのだ。

「こんなふうに考えることは、きつと思いがっているかもしれないけど——」
と、布由子は言った。

「もしも、教習所へ行かないで、いきなり仮免や実地試験をうけて免許をとることが不可能に近いことだとしても、でも、それはできないことじゃないわ。法律では可能なのよ。だからわたし、それに挑戦してみようと思っていたところだったの。こんなこと言うと、波留子ねえさんにいやな思いをさせるかもしれないけど、この病院を退院して、それからすぐに教習所へ入ったりして、そのあと、よそから変な噂を立てられたりすると不愉快でしょう？ あの子は飯塚の精神病院から出てきたばかりだ、どうしてあんな子にクルマの免許なんかとらせるのか、なんて陰口きかれたりすると、傷ついちゃうもの」

「それはそうね」

波留子はうなずいた。こちらが考えている以上のことを、布由子はいろいろ思いめぐらしていたにちがいない。

「達夫さんがそんなふうに誘ってくださったんなら、わたし喜んでご一緒するわ。そしてマウイ島で思うぞんぶんクルマを走らせてみる。それに、ハワイで奈津子ねえさんに会えるなんて、うれしいじゃない」

布由子は目をキラキラ光らせながら、弾んだ口調で言った。

「で、出発はいつ？」

「十月のはじめだつて」

「じゃあ、もうあんまり日にちがないわね。早く退院して、いろいろ準備をしなきゃ」

「そうなの。それで具体的な打ち合わせに今日やってきたのよ」

「いろいろすみません」

布由子は急にしおらしく頭をさげると、

「沢木先生とお会いするのも、ここへやってきた目的の一つでしょう？」

と、ひやかすように言つた。そのときドアがあいて、沢木医師が姿をあらわした。

「先生、くしゃみ出なかった？」

と、布由子が聞いた。

「なにかぼくの噂でもしてたのかい」

「そうなの。もっぱら先生の噂でもちきり。だって沢木先生、おもてになるんですもの」

そんなふうに冗談を言つたりする布由子を、波留子はずいぶん長いあいだ見なかったような気がした。すこし快活すぎるかな、という気もしないではなかったが、とりあえず、元気な布由子を見ることはうれしかった。

「なにかいい話でもあったのかい」

と、沢木医師が言つた。布由子はうなずいた。

「先生にはないしょ。でも、とってもいい話」

「きみの退院の手続きは全部オーケーだからね」

と、沢木医師は言った。

「福岡のお宅のほうの準備さえととのえば、いつでも大丈夫だ」

「実は、できるだけ早く退院させたいんです」

と、波留子が言った。

「外国旅行へ出かける予定があるもんですから」

「外国旅行だって？」

沢木医師は目をみはって、

「布由ちゃんとあなたと、二人だけで？」

「いいえ、ツアーの御一行と一緒になんですけど」

「ほう——」

沢木医師は腕組みして、たずねるように波留子の顔を見つめた。

「知りあいのかたがハワイへ旅行されるものですから、そのグループに加えていただくことになったんです。向こうでアメリカから奈津子も合流して、帰りは一緒に帰国する予定なんです」

「そいつはすごい」

沢木医師は首をふった。

「でも一応、詳しい話だけは聞いておきたいな。もしよかったら、この近くの店で、旨い鰻^{うなぎ}を食^{うなぎ}わせるところがあるんだけど、一緒にどうですか」

「先生はよろしいんですか」

「うん。一時間半ほど体をあけてもらった」

「わたしも一緒に、いいでしょう？」

と、布由子が言った。沢木医師がうなずくと、布由子は立ちあがって、

「すぐ仕度をしてきます。待っててください」

と言って、駆けだすように部屋を出ていった。

面会室にとり残された波留子と沢木医師は、しばらく黙って向きあっていた。

「ハワイ旅行とはね。ずいぶん思い切ったもんだ」

「布由子には無理でしょうか？」

「いや——」

沢木医師はしばらく考えていたが、大丈夫だろう、と、うなずいて言った。

外でひとしきり、バレーボールに興じている患者さんたちの歓声がきこえた。

「誰と一緒に行くんだい？」

と、沢木医師が聞いた。すこしかすれた声だった。

金森商店のお得意様御一行の招待ツアーに便乗して、波留子と布由子がハワイへ出かけることになってからは、妙に気ぜわしい日々がつづいた。

旅券やその他の手続きは旅行代理店のほうで、万事手際よくすすめてくれていた。だがいちばんの問題は、布由子の退院のことだった。

布由子が飯塚の嘉穂緑水会病院を退院することになった日、波留子は達夫とふたりで福岡の街から、彼の運転する店名人りのマークⅡで迎えに行った。達夫は布由子の退院のときは、かならずおれが車を運転して一緒に行くよ、と、かねがね言ってくれていたのである。

かつて奈津子の恋人であった彼の心の中には、もしあのまま奈津子と結婚していたならば、波留子は義理の姉、布由子は妹になっていたはずだ、という思いが時々ちらと頭をもたげるらしい。布由子に対しては、以前から自分の妹のように優しくかったし、いつも彼女のことを気にかけてくれていた。

こんども、彼はわざわざ仕事を休んで、自分でハンドルを握って同行してくれたのである。

その日は、夏の名残りの暑さが西日本一帯にぶり返して、天候のネジが逆に回り出したんじゃないかと思われる三十度ちかい暑い午後だった。

金森達夫は、トラックやバイクの間を巧みに車を走らせながら、飯塚市への国道をかなりのスピードで走っていった。ポロシャツにコットンのパンツをはき、白いトレーニング・シューズをはいた彼の雰囲気は、老舗の若い後継者というより、すこし年をくった学生のようなだ。陽灼けたその感じのいい横顔を見るときもなしに眺めていると、ふと波留子には彼がなんとなく自分の身

内のように感じられてくるのだった。

「達夫くん」

と、波留子は運転の邪魔にならないように、ひかえ目に彼に話しかけた。

「なんでございますかな、姉上様」

「あなたって、なかなか魅力的な青年ね。あらためて言うのもおかしいけど、見なおしたわ」

「サンキュー。どうせなら言葉でより行為にあらわしていただきたいものですな、そういうことは」

「ばかね。そんなふうにハンドルをにぎって、きつと前方をみて運転に熱中してる姿が、すきだと思っただけよ」

達夫は一段ギアをおとして、大型のトレーラーを一気に抜きさりながら、軽い調子で喋りだした。

「波留子ちゃんだって、そんなふうに年相応の大人びた服を着て、お行儀よく運転席のとなりに坐っていると、なかなか結構なもんですよ。もし、どこか知らない場所で、あんたみたいな年上の女の人に偶然に出あったら、おれ、きつと後をついてゆくんじゃないだろうか。最近のいいかげんな女の子たち、ほら、なんとかギャル、なんて連中にくらべると、抜群に古風な魅力にあふれていらっしやる。おれが、あんたのこといろいろ口説いたりするのは、男として自然なことのように思えてくるね」

波留子は達夫のリズムのある早口のお喋りをききながら、奈津子はどうしてこんないい青年を

ほっというて福岡を出ていったんだろう、と、考えた。

「奈津子の気持ちかわからないわ」

と、彼女は言った。

「あなたのどこに不満があったのかしらね」

「これは、きつい御感想——」

達夫はおどけた口調で首をすくめると、

「たぶん、小生の性的能力に物足りなさを感じたのではないんでしょうか」

「なにを言ってるのよ」

「当時はおれも子供だったからねえ」

「いまは？」

「ためしてみられてはいかがです」

「ばかね」

「それ、それ。その、ばかさ加減に愛想をつかしたんだと思うよ、まじめな話」

達夫は口笛で古い昔の映画に出てきた〈アズ・タイム・ゴーズ・バイ〉の出だしのメロディを器用に吹いてみせると、

「おお、わが過ぎ去りし青春の時よ。いまは時の流れとともに遠くへ去りゆきぬ。奈津子よ、思ひ出の女よ、フェアウェル・マイ・ラブリーよ。汝の心は、いま、いずこにありや」

「おかしな人ね、達夫さんって」

波留子は身をよじって笑った。だが、そんな達夫の、一見わかく感じられる横顔に、どこか青春期を通過して現実との苛酷なたたかひの中にある大人の男のたくまじさが漂っていることも、見逃さなかった。

「男の人って、子供っぽくは見えても、結局はなかなかの大人なんだ。わたしも若い頃はそれに気づかなかった時もあつたけど、最近なんとなくそれがわかるようになってきたらしいわ。奈津子もあの当時は、この達夫さんのそんな隠された一面を、つい、見逃していたんじゃないかしら——」
達夫の運転する車が、カーブの多い急坂をかなりのスピードで駆け抜けて、峠を過ぎると、やがて飯塚の街が樹々の濃い緑のあいだから見えてきた。八木山峠というその場所は、昔は越えて通るのに大変な苦勞のいる場所だったときいたことがある。

「ポタ山も、一年一年瘦せてゆく——」

波留子は遠くに見える二つ並んだポタ山の影を眺めながら、そう思った。かつて炭鉱がエネルギーの主役だった時代のこの街は、あちこちに堂々としたポタ山がそびえ立っていたものだ。炭鉱が合理化の嵐のなかで、次々に閉山を強行されてゆくと、その姿も少しずつ変っていった。そしていま、ほとんど石炭の掘られていない飯塚の周辺には、立派な道路が走り、新しい建物もふえ、そしてポタ山の姿だけが日一日と少なくなってきた。

ブルドーザーで崩されたものもあり、雑草におおわれて緑の丘に変わったものもあり、風雨にけずられてほとんどその形を失ってしまったものもある。波留子は車の窓から、子供のころに父親と一緒に峠から眺めたこの土地の記憶を、複雑な感慨で思いおこした。